

魔法少女

悪の女幹部に

逆NTR



# 魔法少女・悪の女幹部に逆NTR

～体験版～

## 目次

第一章 純愛手コキ

第二章 逆NTRフェラ

第三章 逆NTRパイズリ

## 第一章 純愛手コキ

ある若い男がパソコンでネットニュースを見ている。そこにはアニメの中でしか見たことがないようなひらひらとした衣装をまとった女の子が戦っていた。

——魔法少女。

彼女たちはそう呼ばれている。

もちろん彼女たちはアニメの中から飛び出してきた存在ではない。ある日突如として異世界から『アラクラン』と呼ばれる組織がこの世界に侵略してきた。未知のテクノロジーを持つ彼らにこの世界の人間たちはほとんど何もすることができなかった。

しかし、アラクランが持ち込んだのは恐怖だけではなかった。希望の光もあったのだ。この世界と異世界をつなぐ道から謎の光の粒子が降り注ぎ、その光の粒子に選ばれたものだけが不思議な力を使えるようになったのである。その力はなぜか若い女性にしか使えなかった。

人々は彼女たちを『魔法少女』と呼んだ。

「しかしまあ、また魔法少女の圧勝か。いつも通りすぎてニュースとしてもいまいちだよな」  
若い男はラフな格好でポテチをつまみながらニュースを見ている。平日の昼間からアパートの部屋に引きこもっているところを見ると、まともな生活は送っていないのだろう。

「こいつらなんでもいつも魔法少女にやられるのに出てくるんだ？ 無策にもほどがあるだろう。アラクランって組織も数が多いだけで実はたいしたことがないんじゃないか？」

男は陰でどれほど魔法少女とアラクランが激しい戦いをしているかも想像できないようだった。たとえネットなどで魔法少女とアラクランの戦いを知っていたとしても、それは結局表面的なものではないのだ。

男の名前は東海マサル（とうかい まさる）。近くの大学の学生だが、授業が面倒になったために最近是不登校気味だ。このままでは単位が足りずに留年は確定だろう。しかし、マサルはそんな心配をしている様子は微塵もなかった。

「それにしても——」

マサルはネットニュースの動画で動いている魔法少女を見て頬を緩ませる。

「相変わらず魔法少女っていうのは可愛いなあ。いいよなあ。俺にもこんなかわいい彼女がいたら毎日が楽しいだろうなあ」

ありえないと思いつつも、マサルは妄想するだけならタダだからという理由で画面の中の魔法少女に思いをはせる。しかしその時、そんなマサルの妄想を邪魔するかのように玄関のチャイムが鳴った。

ピンポン。

「もうっ、なんだよこんな時に。ネット通販で何か頼んだわけでもないのに……。宗教の勧誘だったらすぐに追い返してやる」

マサルは不機嫌に足を鳴らして玄関のドアを開けた。

「はい、どちら様ですかっ!？」

しかし、マサルがドアの向こうにいた人物を見た瞬間、全身が痺れたように固まってしまった。それもそのはずで、そこには先ほどまでネットニュースで見いていた可愛い女の子――魔法少女が立っていたからである。

「突然お邪魔します。こちらは東海マサルさんのお宅でよろしかったでしょうか？」

「……」

マサルはあまりのことに声が出ない。身体も動かずただじっと石像のように目の前のひらひら衣装の魔法少女を見下ろしているだけであった。

「あ、あの〜」

「……はっ! すみませんっ! ちょっと待ってくださいっ!」

マサルはバタバタと一度部屋の中に入っていき、先ほどまで見ていたネットニュースの写真を穴が開くほど見つめる。何度見ても、角度を変えて見ても、一度ブラウザを閉じて再び開いて見ても玄関先にいる魔法少女はこのネットニュースに載っている魔法少女であった。

「ま、間違いない……。魔法少女モモカ……。本物だっ!」

本物の魔法少女とわかればいつまでも待たせておくわけにはいかない。なぜマサルのところ魔法少女がやってきたのかはわからないが、マサルにとってそんなことはどうでもよかった。魔法少女が近くにいる。話すことができる。もしかしたら触ることができるかもしれない。それだけで他のことはどうでもよかったのである。

マサルは再びバタバタと玄関へと走っていき、ドアを開けた。そこには先ほどと変わらず可愛らしい魔法少女が立っている。

「えっと……。もう大丈夫でしょうか？」

「う、うん。えっと……。魔法少女モモカ、ちゃんでいいんだよね？」

「はい。私は魔法少女モモカですっ! 私のこと知っていたんですね。ありがとうございますっ!」

魔法少女モモカといえばマサルの町で活躍している魔法少女だ。この町に住んでいてモモカのことを知らないほうがおかしいだろう。しかし、モモカは本当にマサルが自分のことを知っていてくれて喜んでくれるようだった。この純粋さが魔法少女としての資質なのかもしれない。

「今日はどうしてこんなところに? 俺に何か用なのかな?」

「はい。少しデリケートな話になるので、マサルさんのお部屋にあらせてもらってもよろしいでしょうか?」

「ええっ!?! うちにあがるの?」

「あつ、やっぱり無理ですよね。急に押しかけて部屋にあらせてくださいって言っても迷惑なだけですよね」

「い、いやっ、そんなことないよっ！ 大丈夫。で、でも、ちょっと待ってて。すぐに部屋を片付けるから」

マサルは再びドタバタと部屋の中に入ってしまった。物やゴミが散乱しているこの部屋を魔法少女に見せるわけにはいかない。普段からしっかりと掃除をしてこなかった自分をこれほど恨んだことはないだろう。

「くっ、とにかくゴミはゴミ袋に詰めて押し入れに放り込んでっ！ あとのものは部屋の隅に固めて布団でも被せておけば誤魔化せるか？ っていうか、それしか方法はないっ！」

時間がないのだ。モモカを待たせるわけにもいかない。マサルはすぐさま今言ったことを実行し、息を切らせて玄関までモモカを迎えに行った。

「ど、どうぞ……。汚いところだけど、あがつて」

「お邪魔します」

モモカは礼儀正しくお辞儀をするとマサルの部屋へと入ってしまった。モモカが部屋に入ると、マサルは奇跡的に持っていた座布団をモモカの前に敷く。

「どうぞ座って」

「ありがとうございます」

座布団は一枚しかないのでマサルは直に床に座った。相對して見てみるとモモカの可愛らしさが一段と際立つ。

「そ、それで、どうして魔法少女であるモモカちゃんが俺のところには？ 俺、心当たりがまったくないんだけど」

「その前に、私の自己紹介をさせて。おにいちゃんっ！」

「お、おにいちゃんっ!？」

それは小さい女の子から言われてみたい言葉であるとともに妹がいなければまず言われることがない魔法の言葉——。そんな言葉をまさか魔法少女モモカから言われるとは思ってもみなかっただろう。

(俺、今日幸せすぎて死ぬのかな……)

マサルはまさに天にも昇る気持ちだった。

「おにいちゃんっって言われると、何だか照れるなあ」

「うくん、やっぱりその様子だと気づいてないみたいだね」

「へっ？ 気づいてないって、何が？」

「私たち、前に会ってるんだよ？ それもかなり昔に」

「ええっ!？ ぜ、全然わからなかった……。でも、こんな可愛い子を忘れたりするかなあ？」

「か、可愛いだなんて……。うふふふっ」

モモカはマサルに褒められて照れているようだった。少なくともマサルに対して嫌悪感などは抱いていないようである。

「あつ、そうか。普通の人には認識阻害の魔法が自動的にかかるんだっけ。ちょっと待ってね。おにいちゃんにかけられてる魔法を解くから」

「認識阻害？ 俺、いつの間にか魔法をかけられてたのか？」

「うん。どっちかというのか魔法がかかっているのは私のほうかな。私を見た人は自動的に私の正体に気づかない魔法にかかるの。そういう自動的に発動する魔法。今からその魔法の効果を解いてあげるね」

「と、ということは……魔法少女モモカの正体が俺にもわかるってことか！？」

「そういうことだね。そうしないと話がうまく進まないだろうから」

マサルにとっては何のことかまったくわからなかったが、それよりも魔法少女の正体を知ることができるというのが魅力的だった。謎に包まれた魔法少女のことを知ることができなのだ。興奮しないわけがない。

「それじゃあ、いくよ。えいっ！」

モモカは何もないところから魔法のステッキを取り出すと、そのままマサルに向けて光を發した。あまりのまぶしさにマサルは目を開けていることができない。

「うおっ、まぶしいっ！」

光は一瞬のことで、すぐさま元の明るさに戻った。マサルは自分の身体に変化がないかを確認してみたが、特に変わったところは見られない。

「あれ？ 何も変わってない——」

詳しい話を聞こうとマサルはモモカのほうに顔を向けた。その瞬間、マサルの頭の中で封印されていた箱がパカリと開いたような感覚があった。

「も、モモカちゃん……？ もしかして、九法モモカ（くのり ももか）ちゃんっ！？」

「思い出してくれたんだね、おにいちゃんっ！」

モモカは目を潤ませる。それほどマサルがモモカのことを思い出してくれたのがうれしいのだろう。

そう、マサルとモモカはすでに十年も昔に出会っていたのだ。その頃はまだ二人とも小さな子供で、年齢や性別の垣根を超えて仲良く遊んでいた。しかし、モモカの父親の転勤が決まり、モモカも引越してしまったのである。それ以降マサルはモモカと出会っていない。そして今日ようやく二人は互いのことを認識したうえで再会したのである。

「モモカちゃん、本当にあのモモカちゃんなんだね」

「うん。ずっと会いたかったよ、おにいちゃん。でも、今の私は魔法少女だから、むやみに親しい人を増やすわけもいなくて我慢してたの」

「そうだったのか……。でも、それならどうして今日は俺のところ？ 今の話からすると俺

と会うのもまずいんじゃないの？」

「そう、それが今日の本題。おにいちゃんっ、このままだと世界は危ないのっ！ おにいちゃんので世界を助けてっ！」

「……はい？」

マサルとしてももし自分に魔法少女のような力があるなら世界のために戦うのも悪くないと思っている。しかし、マサルはただの人間だ。モモカのように魔法少女でもなければ、何か超人的な力を持っているわけでもない。お金もなければ頭もそんなに良くないのだ。こんな取柄が一つもないマサルが世界やモモカの助けになるようなことがあるのだろうか。

「ごめん、ちよっと意味がわからないんだけど」

「そうだよ。簡単に話すと、おにいちゃんにも私たち魔法少女のようなすごい力が隠されていることがわかったの」

「お、俺にそんな力がっ！？ もしかして、俺もモモカちゃんと同じように変身して悪の組織と戦う正義の味方に……っ！」

「うくん、それはちよっと無理かな。おにいちゃんが持っている力は、直接戦うものじゃなくて、私たち魔法少女をサポートするためにあるような力だから」

「そ、そうなのか」

マサルはカッコよく戦う自分を一瞬だけ想像したが、次の瞬間にはその妄想は霧散した。しかし、悲観する必要はない。何の取柄もない自分だと思っていたのに実はすごい力が隠されていたというだけでもマサルにとって人生一発逆転の大チャンスなのだ。

「具体的にはどういう力なんだ？」

「私たち魔法少女の力——おにいちゃんにわかりやすく言うと魔力っていうのかな、異世界から得られた力を大幅に増幅する力があるみたいなの。それが私たちの組織の調査でわかったんだよ」

「モモカちゃんたち魔法少女の組織っていったら、『MGO』か。いったいどうやって俺のことを調べたんだろう？」

「うくん、それは私もよくわからないなあ。MGOは世界規模の大きな組織だからね」

MGOとは魔法少女機構の略称で、悪の組織アラクランに対抗するために組織された世界中に存在する正義の機関である。ほとんどの魔法少女はそのMGOの協力のもとにアラクランと戦っているのだ。MGOのエージェントといえば老若男女問わず優秀でその存在も一般人には秘匿されているという。マサルがMGOのエージェントと知らず知らずのうちに接触していた可能性は十分あるのだ。

「と、とにかく、俺には魔法少女をパワーアップできる能力があったってことなんだよね？ いやあ、俺も知らなかった能力を発見してくれるなんて、MGOには感謝しかないよ。……あれ？ でも俺の力って本当に必要なのかな？ 今でも魔法少女たちはアラクランを圧倒してるじゃない

いか。別に俺の力でパワーアップしなくても十分勝てるんじゃない？」

「ううん。それは違うよ、おにいちゃん。今まで戦ってきたアラクランの戦闘員はどこにでもいる一般兵みたいなものなの。でも、MGOがつかんだ情報によると、ついにアラクランは幹部の一人を動かすことになったみたい。その名は、『ドエーロス』」

「ド、ドエーロス……」

「……」

「……」

「なんか、名前だけでどんな幹部か想像がつくね」

「うん……。たぶん合ってると思う。情報によるとすごい格好をした女幹部って聞いているし。映像も見たけど、本当にそれっぽい名前の格好だったよ」

「名は体を表す、か」

マサルとしてはぜひとも見てみたい気もするが、それは興味本位であってドエーロスに魅了されたというわけではない。この町を守る魔法少女の正体がモモカということがわかってマサルはさらに魔法少女のことを好きになっているのだ。

「それで、そのドエーロスっていう女幹部がこの町に来るってことなんだよね？ やっぱり強いってこと？」

「うん。少なくとも私が今まで戦ってきた戦闘員なんか比じゃないくらい強いと思う。だから私も今までと同じじゃないの。私もおにいちゃんの力でパワーアップしないとこの町を守れないかもしれないのっ！」

「なるほど、そういうことだったのか」

マサルの中でようやくこの話が一本の線につながった。新たな強敵と戦うためにマサルの秘められた力が必要だというのだ。マサルとしても協力しないわけにはいかないだろう。

「そういうことならもちろん協力するよ。それで、俺はどうすればいいの？ なんか魔法少女みたいに杖とか出すのかな？ やり方とかわからないからすぐには無理かもしれないなあ」

「えっと……。そんなものなくても大丈夫だよ。た、たぶんおにいちゃんがいつものようにやってることだから……」

「俺がいつものようにやってること？」

何だろうとマサルは首をひねってみる。マサルがいつもやっていることで、魔法少女に力を与えるような行為。いくら考えてもマサルの頭では思いつかなかった。

「わからないな。俺がいつものようにやってることって何なんだ？ はっきり言ってほしいんだけど」

「えっと……。それはね……。モゴモゴモゴ……」

なぜかモモカはマサルにはっきりと言わずに口をもごもごと動かしているだけだ。それほどまでに言いづらいことなのだろうか？ マサルは訝しがる。

「えっ？ そんな小さい声じゃ聞こえないよ。もっとはっきりと話してくれないと」

「だ、だからね……。——き、なの」

「……き？ まだ小さいよ。もっと大きな声で」

「ううう……。だから、精液なのっ！ おにいちゃんの精液を体内に取り入れることで私たち魔法少女はパワーアップするらしいのよっ！」

「なるほどね。精液か……。はあっ！？ せ、精液っ！？ 精液って、あの精液かっ！？」

「そ、そう……。もう、そう何度もそんな言葉連呼しないでよ」

「あ、ごめん」

モモカは恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしてうつむきがちになる。

「で、でもそんなことあり得るの？ いくら何でも信じられないよ」

「私も最初はそう思ったんだけど、どうもおにいちゃんはこの世界にある魔力を吸収して精液の中に貯めこむ特異体質のようなの。だからその精液を摂取すれば、私たち魔法少女はパワーアップできるって理論らしいの」

「はあ、そう言われるとなんとなく納得しちゃいそうになるけど……」

しかし、本当にそんなことがあり得るのだろうか。確かめてみるまでは納得できないというのが本当のところだろう。だが、確かめるというのはモモカにマサルの精液を飲ませるといふことなのである。

「モモカちゃんは、それでいいの？」

「う、うん。これもこの町のため、世界のためだから」

モモカは魔法少女としての職務を全うしようとしている。モモカの正義感や責任感の強さがかがえる言葉だ。

「……わかった。すぐに必要なんだよね？ 俺、トイレで精液を出してくるから、ちよっと待ってよ」

「ちよっと待って」

恥ずかしさから逃げるように席を立とうとしたマサルだったが、その袖をモモカが引っ張って引き留めた。マサルはバランスを崩して尻餅をつく。必然的にマサルの股間のあたりにモモカの顔が来た。

「わ、私も子供じゃないから、精液をどうやって出すかくらいは知ってるつもりなの。だからね、おにいちゃんの射精、私に手伝わせてくれないかな？」

「えっ！？ そ、それって——」

「えっと、私も実際にこういうことをやるのは初めてだから、手でやるだけになると思うけど、それでもいいなら……」

ゴクリッとマサルは生唾を飲み込む。つまりモモカが手コキをしてくれるというのだ。あの憧れの魔法少女姿で、である。

(ああ、俺、本当に今日幸せすぎて死んでもいい……)

「そ、それで、おにいちゃん……。返事は？」

「う、うん。お願いするよ」

「あ、ありがとう」

お礼を言うのはこちらであるとマサルは思ったが、緊張でこれ以上の言葉が出てこない。しかし、興奮で股間のほうはすでに痛いくらいに勃起していた。

モモカは恐る恐るとマサルのズボンを脱がせていき、大きく勃起したペニスを取り出した。初めて生で見るとペニスにモモカも興味津々のようだ。

「男の人のここのって、こんなふうになってるんだ……。資料で読んだ情報と全然違う……」

どんな資料を読んだのか気になるところだったが、今のマサルはそれどころではない。目の前に美少女がいて自分のペニスを凝視しているのだ。ただそれだけで早くも射精してしまいそうになる。

「じゃあ、触るね」

「う、うん」

モモカがそつとマサルのペニスを握ると、「うっ」と小さな声がマサルの口から漏れた。モモカも手コキが初めてかもしれないが、マサルにとっても誰かの手でしごいてもらうのは初めての経験なのだ。わずかな刺激がマサルにとっては脳髄にまで染み渡る快感となって襲い掛かる。

「うわあ、すごく熱い……。これが男の人のおちんちなんだ」

ペニスのことを「おちんちん」というあたりモモカの幼さが読み取れる。しかし、いくら性知識が幼くとも、見た目は誰もが認める美少女なのだ。そんな美少女に触られてマサルがいつまでも我慢できるはずがない。しかし、このまますぐに射精してしまつてはもつたいたいというのも事実だ。マサルは全身全霊を込めて射精を我慢した。

「モモカちゃん、そのまま、そのまま手を上下に動かしてくれないかな。そう、しごくように」

「い、こころ」

シコ、シコ、シコ……。

モモカはマサルに言われたようにゆっくりと手を上下に動かす。まだ恐れもあるのか、その動きは緩慢だが、確実にマサルのペニスを昂らせていた。

「いい、気持ちいいよ、モモカちゃん。その調子でお願い」

「うん……。出したくなつたら我慢せずにいつでも出していいからね」

「わかった」

そうは言ったものの、すぐに射精してしまつてはもつたいたい。マサルは言葉とは裏腹にまだまだ射精しないぞと歯を食いしばるのだった。しかし、それもいつまで持つかわからない。童貞であるマサルにとってはモモカの拙い手コキですら強烈な性行為になるのだ。

シコシコシコ。

モモカも慣れてきたのか、少しずつ手コキのスピードがあがってきた。自分では気づいていないようで、無意識にマサルのペニスを責め立てる。

「うっ、モモカちゃん……」

「ど、どうしたの？ もしかして、射精しそうなの？」

「う、うん」

このままではもう持たないと思ったマサルはトドメをさしてもらうことにした。どうせ射精するなら最高に気持ちのいい射精をしたいものだ。

「もっと速く動かしてくれるかな。それでイケると思うから」

「えっ？ でも、もっと早く動かしたら痛くないのかな？」

「大丈夫。だからもっと」

「う、うん。わかった」

モモカはマサルの指示通りに手コキのスピードを速くした。モモカの顔が赤くなっているのは手を激しく動かしているからだけではないだろう。モモカもモモカでマサルのペニスをしごいて興奮しているのだ。純情そうに見えても、性に対する好奇心は抑えがたいものがある。

そして、ついにマサルの我慢の限界がやってきた。

「で、出るっ！」

「出して、私が受け止めるから……っ！」

「ううっ！」

びゅるるるるっ！

「きゃあっ！」

濃い白濁液がモモカの顔めがけて発射される。一瞬でモモカは顔は真っ白に染まった。

「すごい量……。それに、これが男の人の精液……」

モモカは精液の臭いをかいで少し顔を歪めた。さすがに初めてでこの臭いに慣れるというのは無理があるだろう。

「なんか、独特な臭いだね」

「ご、ごめん」

「ううん、謝らないで。責めたいわけじゃないから」

モモカはそう言って恐る恐るペロリと手についた精液を舐めとった。苦そうな顔で無理やりのその精液を嚥下する。

「うう、話には聞いてたけど、確かにおいしいものじゃないかも……」

「そ、そうだよ。無理に飲まなくてもいいから」

「そうはいかないよ。これを飲まないと私はパワーアップできないんだから」

正義のためにモモカはマサルの精液を舐めとっていく。その光景を見ただけでマサルの股間は再び熱くなっていくのだった。

「こんなものかな？」

ある程度の精液を舐め終わると、モモカは洗面台を借りると言って風呂場のほうへ向かっていった。自分である程度舐めとったとはいってもやはり臭いや粘りは完全にはなくなっていなかったのだろう。顔を洗って綺麗にしたかったに違いない。

(モモカちゃん、すごかったなあ)

モモカの柔らかい手でペニスをしごかれたマサルはその感触を忘れないようにと脳みそに刻み込んでいる。もしかしたらこんなことはもう二度と起こりえないかもしれないのだ。

そうしている間にモモカは風呂場から戻ってくる。

「ごめんなさい。待たせちゃったよね？」

「いや、大丈夫だよ。それで、これで本当にモモカちゃんがパワーアップしたのかな？」

「どうだろう？」

モモカは自分の身体を確かめるように手足を動かしてみる。しかし、身体能力には変化はないようだ。

「身体は変わってないみたいだし、やっぱり変化があるとしたら魔力のほうかな」

モモカはマサルにかかっていた認識阻害の魔法を解いた時のように何も無い空間から魔法のステッキを取り出した。意識を集中し、身体の内側に魔力を練り上げる。

「ぬううん……」

次の瞬間、部屋の中に清浄な風が無い踊ったような気がした。マサルが魔力をまともに感じとることはできないが、そんなほぼ一般人のマサルであつてもわかる。今のモモカは何かとてもない力を得ているのだ。それが、マサルの精液から得た魔力であることはモモカが一番よく理解していた。

「す、すごい……。こんなすごい魔力が簡単にコントロールできるなんて」

「……つてことは、パワーアップは成功つて、こと？」

「もちろんっ！」

モモカは魔力を霧散させてステッキを消滅させる。そして空いた両手でマサルに抱き着いた。

「ありがとう、おにいちちゃん。これできつとドエーロスに勝てるよ」

「お、おう。どういたしまして」

実際にマサルのやったことといえは気持ちよく射精したただけなのだが、それで感謝されるというのもなんだか気がひけるような気がした。

「でも本当にすごい……。この魔力、おにいちちゃんの気持ち伝わってくる」

「えっ！？ お、俺の気持ち伝わってるのっ！？」

「う、うん……。おにいちちゃんが私のことをどう思ってるのか、しっかり伝わってきたよ」

「……」

これは恥ずかしい。マサルがモモカに対して射精したことについてはモモカをパワーアップ

させるという大義名分があったからあんな行為に及ぶことができたのだが、そのせいでモモカに対する好意がしつかりと伝わってしまったというのだから何とも言えない。できればそんなリスクがあるということをあらかじめ言っておいてほしかったとマサルは思った。

「あの、勘違いしないでね。別に嫌とかじゃなくて、むしろうれしいというか……」

「えっ、それって——」

「本当はね、おにいちちゃんから精液を回収する役はMGOのエージェントに任せようかって案もあったんだけど、直前の研究で射精時の興奮具合……相手への好感度っていうのかな？ それによって精液に含まれる魔力が大きく変化する可能性があるってことがわかって、それでおにいちちゃんと面識のある私が選ばれたの。だからね、私のことをまだ好きでいてくれて本当にうれしかったんだよ」

「う、うん。わかった」

マサルは今まで生きてきてここまでまっすぐな好意を受けたことがなかった。だからこそこういう時に何と言っているかわからない。ただ恥ずかしさを隠すためにモモカから視線を外すことしかできなかった。

「私をまだ好きでいてくれてありがとう。おにいちちゃんっ！」

この言葉がトドメだった。マサルは完全に恋に落ちた。つい先ほどまでは魔法少女であるモモカを好きだったのだが、九法モモカという女の子のことを好きになっている。これは今までの憧れとしての好きとは明らかに異なったものであった。

「モモカちゃん……」

「おにいちちゃん……」

いつの間にか見つめ合う二人。しかし、そんな甘い時間を引き裂くようにモモカの胸にあるハート形のペンダントがアラムとともに赤く光り出した。

「これは、アラ克蘭の反応っ！ しかもこの強さは今までの戦闘員じゃないっ！ きつとドエーロスがやってきたんだ」

「ま、まさか、こんなにも早くっ!？」

「うん。間一髪だったね。でも、おにいちちゃんのおかげでパワーアップした私ならきつとドエーロスにも負けないよ」

「そ、そうだよな。今から戦いに行くんだよね？ がんばって」

「うん。ありがとう。行ってきます」

モモカはにっこりと最高の笑顔を残して窓から市街地のほうへと飛んでいった。きつとあの方向にアラ克蘭の幹部であるドエーロスがいるのだろう。見たい気もするが、危険なので付近にはすぐに避難警報が出るはずだ。マサルにできることといったら、モモカを信じてネットで中継動画を見ることがしかないだろう。

「がんばって、モモカちゃん」

街中に人々の悲鳴が響きわたる。アラ克蘭のザコ戦闘員たちが街の人々を襲って連れ去ろうとしているのだ。警察も出動しているが、拳銃程度ではザコ戦闘員にすら歯が立たない。結局警察ができることといえば避難誘導くらいのものだ。

こんな危険な状況の中、ネットには街中の混乱の様子がリアルタイムで中継されている。視聴者を獲得するために危ない街中に残ってスマホなどで撮影してネットに動画をあげているのだ。もちろん政府も危険であるためにそのような行為を禁止しているのだが、警察ですらアラ克蘭のザコ戦闘員たちの対応に右往左往している状況で、このようなネット配信者たちを取り締まっている余裕などない。実質自己責任による動画撮影は黙認されていた。しかし、そのおかげでマサルのような人たちにも魔法少女がアラ克蘭と戦っている様子がリアルタイムで視聴することができるのだ。

「えっと、あつたあつた。『森のシモベ』さん。この人のチャンネルが一番いいアングルで戦闘の様子を映してくれるんだよな。今日もよろしくお願いしますよ」

マサルはパソコンの画面からモモカの様子を観察する。精液で魔法少女をパワーアップさせることができること以外にはマサルはどこにでもいる一般人なのだ。現場に行つてモモカの手助けなどできるはずもない。だからこそ、せめてパソコンの前では全力で応援しようと心に決めていた。

街中で暴れているアラ克蘭のザコ戦闘員たちの前に、空から光に包まれた魔法少女——モモカがやってきた。

「そこまですっ！ これ以上の乱暴は許しませんよ、アラ克蘭っ！」

モモカが登場すると今まで暴れていたザコ戦闘員たちが一斉に動きを止めた。今までさんざん仲間たちがモモカにやられてきているのだ。彼らにとって魔法少女というのは名前だけでも恐怖の対象であろう。

「へえ、あなたが魔法少女モモカかしら？」

そんなザコ戦闘員たちの中を悠然と歩いてくる人物がいた。派手な赤い髪色に煽情的な衣装を身にまとった痴女のような女性……。

「あなたは——ドエーロスですね」

「へえ、私のことを知ってるのね。あなたとは初対面のはずなんだけど？」

「私たちには心強い味方がいるんです。その仲間が常にあなたたちの情報を集めていますから」

「MGOね。まったく、厄介な組織を作ってくれたものね、この世界の人間も」

「たとえ私たちのように魔法が使えなくても、そうやって戦う方法もあるんです。それがこの世界の人間たちの強さです」

「ふくん。まあ、それならそれで対処するわよ。でも今は——あなたの相手をするのが先かし

らね」

「望むところです。私もあなたが厄介な相手であることは理解しています。この一回で勝負を決めましょう」

ザコ戦闘員たちはドエーロスの力になれないことがわかっているのか、まるで観衆のようにモモカとドエーロスを取り囲んだ。もちろん応援するのはドエーロスのほうなのでモモカにとつては完全にアウエーだろう。

「まずは小手調べで、こういうのはどうかしらっ!？」

ドエーロスは指先から真つ黒な光の小球を浮かび上がらせると、それをビームのように放出した。高エネルギーの闇の塊がモモカを襲う。しかし、モモカはその程度の魔法は避ける必要もないかのように魔法のステッキで弾き飛ばした。

「無駄ですっ!」

「あら? 思ったよりやるわね。それなら、こういうのはどうかしらっ!」

ドエーロスは両手から先ほどの小球より大きな真つ黒な光の玉を左右同時に放出した。一本のステッキでは二つの魔法の弾は防ぐことはできない。そう思つての攻撃だろう。

さすがのモモカも防ぎきれなかったらしく、ドエーロスの攻撃は爆炎とともにモモカを包み込んだ。完全なる直撃だった。

「あら、まさかこの程度で終わり? もう少しやるものかと思つてたんだけど」

ドエーロスは勝負あつたと思つているようで、余裕の笑みを浮かべている。実際周りのビル窓などは破壊されており、その衝撃の凄まじさがわかるというものだ。この中で無事にいると思つほうがおかしいだろう。

「も、モモカちゃん……」

中継を見ているマサルも手が震えている。ザコ戦闘員との戦闘ではこれほど激しい攻撃を受けたことはない。まさにドエーロスがアラクランの幹部であることを示すような一撃だった。

そんな強烈な一撃だったが、砂塵が晴れてくるとドエーロスの余裕の表情が固まった。

「……は?」

モモカはあれほどの攻撃を受けてまったく傷ついていなかった。その魔法少女の衣装にすら塵一つついていない。まるでそこだけ衝撃が何もなかったかのようなのである。

「この程度の攻撃なら、少し魔力を練つて壁にすればいいだけです」

「す、少し……? 私の攻撃を少しの魔力の壁で防ぐですってっ!？」

余裕の表情が崩れ、ドエーロスは不快感を露わにした。

「そう……。どうやら今までザコ戦闘員を使って採取したデータには誤りがあつたみたいね。あなたを過小評価していたみたいだわ。まあ、それでも私が負けることはあり得ないわよ」

ドエーロスは黒い魔力を練り上げて一本の剣にした。遠距離での攻撃がダメなら近距離で勝負を決めようということなのだろう。

「私のスピードについて来られるかしら？」

ドエーロスはまっすぐにモモカへと突き進んでいく。モモカは冷静に白い光の魔法を放ってそれを迎撃した。しかし、白い魔法の光線はドエーロスの身体をすり抜けて二人を取り囲んでいた。ザコ戦闘員たちを吹き飛ばしたただけであった。

「残念。それは幻影魔法よ」

ドエーロスはいつの間にかモモカの後ろにいた。

「これで、終わりよっ！」

ドエーロスの魔法の剣がモモカの身体を貫く——はずだった。

「なっ！」

しかし、ドエーロスの魔法の剣はモモカの身体どころか魔法の衣装すらも傷つけることができなかった。モモカから流れ出る魔力がドエーロスの魔法の剣を完全に防いでいるのだ。

「まさかここまで力の差があるとは思いませんでしたけど、これもみんなのためです。このまま決着をつけましょう」

「お、おかしい……。おかしいわっ！　こんなデータにないっ！　明らかに昨日までとは別人じゃないっ！　いったい何があったっていうのよっ！」

「私たち魔法少女は、日々成長しているんですっ！」

モモカはそう言うと、魔力の塊をドエーロスにぶつけた。原始的な魔法の攻撃だが、それはドエーロスに防ぐすべはない。

「きやああああああっ！」

ドエーロスは軽い人形のように吹き飛んだ。地面にぶつかり二回、三回と跳ね上がる。

「くっ……。あ、ああ……」

「さすがに倒しきれませんでしたか。さすがはアラ克兰の幹部です」

いつの間にかモモカがドエーロスのすぐ側まで来ている。ドエーロスは身体を動かすことができないようで、顔を少しモモカのほうに向けるだけであった。

「こ、これが、この町の魔法少女の力……」

「降参しますか？」

「……降参したら殺されずにすむのかしら？」

「それはMGOの判断次第ですが、少なくとも私はあなたの命を奪いたくはありません」

「そう……。せめてこの命が助かるなら——」

ドエーロスから戦闘の意志が消えた。そう判断したモモカの気が一瞬緩む。ドエーロスはその瞬間を狙っていた。

「今よっ！」

ドエーロスは手元でこつそりと練り上げていた魔力を爆発させ、あたり一帯を閃光で包み込んだ。あまりのまぶしさにモモカも目をつむる。

「しまったっ！」

モモカが次に目を開けた瞬間、そこにはドエーロスの姿はなく、ザコ戦闘員たちが慌てて逃げている様子があたりに広がっていた。

「……逃げられましたか」

しかし、初めてのアラ克蘭の幹部との戦いは完全なるモモカの勝利だった。傷一つつけられていないことから、今度またドエーロスが襲ってきてても対処可能だろう。

マサルもそれがわかっただけに、安心してほっと胸をなでおろしたのだった。

マサルは戦闘の様子を中継していた配信が終わると、気が抜けたようにその場に崩れ落ちた。「モモカちゃん、カッコよかったなあ。可愛いだけじゃなくて強くてカッコいい……。俺、そんなモモカちゃんのこと好きでいいのかな……」

憧れという意味での好きなら何も問題ないだろう。しかし、マサルはモモカのことを深く知ってしまった。いや、以前から知っていることを思い出してしまった。ただ憧れで好きというままではいけないだろう。だからこそ、今のマサルとモモカを比較して自分では不釣り合いではないかと落ち込んでいるのだった。

「……もう少し、がんばってみようかな、俺」

がんばってみても何も変わらないかもしれない。しかし、少しでもモモカに近づくためには何かをしなければならぬ。マサルはそう思い、少なくとも明日は不登校になっていた大学にでも行ってみようかと考えるのだった。

そんなことを考えていると、不意にチャイムが鳴った。まさかと思いつぐに支度を整えて出てみると、そこには再び魔法少女姿のモモカがいたのだった。

「モモカちゃんっ！」

「えへへっ。おにいちゃん、私、勝ったよ」

「うん。パソコンで見てたよ。すごかった」

「これもおにいちゃんのおかげだねっ！」

「えっ？ いや、俺は何もやってないよ」

「そんなことないよっ！ おにいちゃんの精液を飲んだおかげで私はあれだけパワーアップできただもんっ！」

モモカは今いるここがアパートの通路だということも忘れて熱弁する。住人はほとんどいいボロアパートなので大丈夫のだが、それでも可愛いモモカの口から『精液』などという似つかわしくない言葉を発することに冷や汗を流した。モモカもいつもはそんなことを口にする女の子ではないのだが、今は先ほどまでの戦闘で興奮状態にあるのだろう。

「と、とにかく中に入って。もう今日はアラ克蘭が襲ってくることはないだろうか？ ゆっくりしていきなよ」

「うん。これから戦闘に関しての報告をしないとイケないから。事務処理も組織の中で働くうえで必要なことだから」

「ま、まるで社会人みたいだね」

「うん、実際お給料とかももらってるから社会人といつていいのかもしれないね。私もこの年齢でもう社会人なるとは思ってみなかったけど」

「きゅ、給料出てるんだ……」

さすがにいくらもらっているのかは聞けなかった。聞いたらマサルが余計惨めになる。ここでもマサルとモモカとの差を感じられてショックを受けるのだった。

「じゃあさ、せめて、また会えないかな……。今度は、魔法少女のモモカちゃんじゃなくて、普通の女の子のモモカちゃんとして」

「おにいちゃん……」

モモカもマサルの気持ちがわかったのか、少し頬を赤らめて見つめている。そして恥ずかしそうに、

「うん」

と頷くのだった。

アラ克蘭の地球侵略前線基地に戻ってきたドエーロスは怒りをあたりにまき散らしていた。「何なのよ、あれはっ！ 明らかに報告と違うじゃないっ！ 情報分析班、情報分析班の責任者呼びなさいっ！」

「は、はい、すぐに」

下っ端事務員が慌ててドエーロスの部屋から出ていく。それと入れ違いに新たな下っ端がドエーロスの部屋に入ってきた。

「ドエーロス様」

「何？ 責任者が来たの？」

「い、いえ、ドエーロス様にお伝えしたいことがあると言ってきているものがおります」

「誰よ。私は今機嫌が悪いのよ。くだらないことなら後にしてちょうだい」

「それが、魔法少女モモカの強さの秘密を暴いたと言っているようなのですが、いかがいたしまししょうか？」

「何ですって？」

それが本当ならすぐにも飛びつきたい情報である。しかし、これは重要なことだけに慎重にならなければならない。まずは情報源の確認からだろう。

「その魔法少女の強さの秘密を暴いたのはこの誰なの？」

「アラ克蘭の下部組織の責任者の一人です。コードネームは『フォレスト』もともとの世界の人間ですが、我々アラ克蘭に協力している、この世界の人間からしてみたら裏切り者で

すね」

「ふくん。裏切り者はどこまでいっても裏切り者なのよね。いつ私たちアラ克蘭を裏切るかわからないわ。でもまあ、利用価値があるなら使うべきかしら」

ドエーロスは話くらいは聞いてもいい気になってきている。まだこの世界の情勢は拮抗していた。局地的にはアラ克蘭が少し優勢なくらいだ。今ここでその裏切り者が再びアラ克蘭を裏切るメリットは少ないと見た。もし裏切るつもりなら何かしら魔法少女側に大規模な動きがあるということである。それはそれで探りを入れる価値があるというものだ。どちらにしても話を聞かない手はない。

「いいわ。その話、聞きましょう」

「はい。では、通信をつなぎます」

下っ端事務員はコウモリのような生き物を取り出した。この生き物は『コウモリ電話』と呼ばれており、ドエーロスたちが元いた世界の魔法生物である。遠くのコウモリ電話と通信することが出来るまさに電話なのだが、この世界の通信手段とは異なった方法で通信しているために傍聴される危険性が少ないのだ。

「こちら、ドエーロスよ。聞こえてる？」

『はい。こちらフォレストです。聞こえてますよ』

声は若い青年。しかしアラ克蘭の幹部と通話しているというのに臆する様子はない。随分と肝の据わった男のようだ。

「あなたがフォレストね。挨拶はいいわ。魔法少女モモカの強さの秘密がわかったって言うるみたいだけど、本当なの？」

『はい。魔法少女モモカは明らかに以前よりパワーアップしています。その理由はパワーアップさせている人物がいるからです。詳しい資料は後程データで送りますが、原因はその人物から大幅な魔力の補充を受けているからでしょう。パワーアップしたのは、おそらく今日の昼頃。つまりあなたと戦う直前ですね』

「信じられないわね。あなたはどうかやってその情報を手に入れたの？ 私たち本部の情報分析班ですらつかんでいなかった情報なのよ」

「MGOにも隙はあるということですよ。私はMGOのエージェントを手駒にしていますね。そこからある程度の情報は引き出すことができるのです。証拠が欲しいのでしたらこういうのはいかがでしょうか？」

フォレストは少し間を置くと、コウモリ電話から誰かの会話が聞こえてきた。

くくく

「えへへへっ。おにいちちゃん、私、勝ったよ」

「うん。パソコンで見てたよ。すごかった」

「これもおにいちちゃんのおかげだねっ！」

「えっ？ いや、俺は何もやってないよ」

「そんなことないよっ！ おにいちちゃんの精液を飲んだおかげで私はあれだけパワーアップできたんじゃもんっ！」

~~~~~

「これは……」

『はい。一人は魔法少女モモカ。もう一人はモモカをパワーアップさせた人物——東海マサルという人物です』

「どうやってこんな音声を入手したのよ」

『簡単ですよ。モモカの衣装に盗聴器をつけました』

「そんなことできるとは思えないんだけど？ 魔法少女っていうのは怪しいやつが近づけばすぐにわかるんだから」

『それは何も無い場合です。私たちが盗聴器を仕掛けたのは、ドエーロス様との戦闘中です。戦闘に夢中になってる魔法少女に対して、遠距離からこちらの世界の技術で盗聴器を付着させました。あの魔法少女の衣装は物理的なダメージも防ぐようですが、ただ盗聴器を引っ付けるだけでしたら何の問題もなかったようですね』

「なるほど。一応筋は通ってるわね」

ドエーロスが聞いている限りでは怪しいところはない。少なくとも今はまだこのフォレストという男はアラ克兰の味方であるようだった。それならこの情報は有効に使うしかないだろう。

「情報提供に感謝するわ。こっちでも裏をとってみて本当のようだったら褒美をあげましょう」  
『ありがとうございます』

「詳しい内容のやり取りは担当者としなさい。あと、またこういう情報があればすぐに私のところに持ってくるよ。悪いようにはしないわ」

『はっ、かしこまりました』

「通信、切るわね」

ドエーロスはコウモリ電話の通信を切ると、笑みを隠しきれないようにニヤリと笑った。

「これはもしかすると、思ったよりも面白いことになるかもしれないわね……。魔法少女モモカ、あなたに最大の屈辱を味合わせてあげるわ」

その日の夜、マサルは興奮が冷めやらない様子でベッドに入っていた。

「モモカちゃん、すごかったなあ」

あのあとはネットニュースで魔法少女モモカのことを検索していた。どこを見てもモモカを讚える記事ばかりで、マサルは満足感とともにどこかモモカを遠くの人のように感じてしまい寂しさも覚えてしまっていた。

（いやいや、俺は明日から生まれ変わるんだっ！ 真人間になって、モモカちゃんにふさわしい人間になろう。そして、いつかモモカちゃんと……。むふふ……。）

そのためにも明日は早起きして朝食を作るつもりである。ジョギングもして身体を絞ることも大切だろう。大学に行つて勉強もしよう。部屋の掃除もしなくてはならない。やることはいっぱいだ。

（明日だ。明日になれば、俺は生まれ変わってるんだ）

そんなことを考えつつ、マサルの意識は深い闇の中へ――。

「はあ〜い。こんばんは。マサル」

「……へっ!?!」

突然呼ばれたためにマサルは目を開けた。信じられないことに、そこには昼間モモカと戦っていたアラ克蘭の幹部——ドエーロスがマサルの顔を覗き込んでいたではないか。

「うわあああああっ!」

マサルは驚きのあまりベットから転げ落ちた。寝ぼけて幻覚や幻聴を聞いてしまったのかとも思ったが、意識をはつきりさせて見てもマサルの部屋の中には確かにドエーロスが存在していたのである。

「な、な、なんで、お前が……っ!」

「レディーに向かってお前なんて失礼ね。私はアラ克蘭の幹部ドエーロス。ちゃんと名前と呼んでくれないと」

窓から差し込む月明かりがはつきりとドエーロスの姿を映し出す。改めて見るとその姿はサキュバスを思わせるほどの妖艶さがあつた。

「ど、ドエーロス、なんでお前がこんなところにいるんだ。お、お、俺を襲っても何の得にもならないぞ」

「ふ〜ん。本当にそうかしらね？」

ドエーロスの不敵な笑みにマサルはドキリとした。まさかモモカをパワーアップさせた秘密が早くもアラ克蘭にバレてしまったのではないか。そう危惧したのである。

「東海マサル。あなたの精液はこの世界に漂う魔力を蓄積している。そして、魔法少女モモカはあなたの精液を摂取したために今日の昼間、あれだけの強さを発揮した。すでに調べはついでるわ」

やはり秘密はすでに秘密ではなくなってしまっていたのだ。となるとドエーロスがマサルの前に来た理由も想像がつく。マサルを抹殺してこれ以上モモカをパワーアップさせないように

しようとしている。マサルはそう判断した。

「俺を、殺すつもりか」

「あなたを殺す？」

ドエーロスはアハハと声をあげて笑った。

「確かにあなたを殺せば魔法少女の戦力を削ぐことはできるかもしれないわね。でも、それだけよ。私はあの魔法少女モモカにあれほどの屈辱を味合わされたのよ。もっとあの魔法少女が悔しくて涙を流すような復讐をしなければ気が済まないわ」

マサルはドエーロスのどす黒い感情に身震いした。この女はやはり悪の組織の幹部である。並大抵な悪党ではない。しかし、マサルは自分を殺す以外にどうやってドエーロスがモモカに復讐をするのか、まったく予想がつかなかった。

「私の復讐のためにあなたを使う。そのためにはまずあなたが本当に私の復讐に使える道具かどうか確かめないといけないわね」

「いったい、どういう——」

「バインドロープ」

ドエーロスが魔法を唱えるとマサルは黒い光のロープで手足を縛られてしまった。これではまったく身動きができない。

「うぐっ」

「倒れるのもダメよ。立ってなさい」

黒い光のロープに吊り上げられるようにしてマサルは倒れる寸前で強制的に立たされた。この黒い光のロープに縛られている限り、マサルの行動はドエーロスの思うがままのようだ。

「あなたの精液は魔法少女をパワーアップさせるということはわかってるわ。それはあなたの精液に魔力が大量に込められているから……。それなら、私があなたの精液を体内に取り込んだら、どうなるのかしらねえ？」

「……っ！」

マサルはここに来てドエーロスの考えが理解できた。ドエーロスも魔法少女と同じように魔法を使って戦っていた。つまり、魔力が力の源なのだ。マサルの精液を摂取すればモモカと同じようにドエーロスもパワーアップしてしまうかもしれない。

「そ、そんなこと、させるものかっ！」

「我慢するってことかしら？ 面白いじゃない。どれだけ我慢できるか、確かめてあげるわ」  
ドエーロスは魔法でマサルのズボンをずり下ろす。こんな状況だというのにマサルのペニスは勃起してしまっていた。

「あら、あなたのここはやる気満々じゃない」

「こ、これは生理現象だっ！ お前がそんな変態みたいな格好をしているのが悪いんだっ！」

「ふくん。でも、そんな変態みたいな格好に興奮しているのもあなたなんでしょう？ つまり

あなたも私と同じ変態ってことじゃない」

「く、くう……」

口でも言い負かされ、マサルは何も言えなくなる。

「でもまあ、私にとってはあなたが変態でよかったわ。だって、簡単に精液を搾り取れそうなんだもの」

ドエーロスはマサルのペニスを指で弾く。それだけの衝撃でマサルは快感と痛みに悶絶することになった。

「魔法少女はどうやってあなたの精液を搾り取ったのかしら？ まさか自分で慰めたわけじゃないでしょう？」

「そ、そんなこと、お前に言うものか。どうだっていいだろう」

「ふん。まあ、そうね。どうでもいいわよね。だって、大事なのは今からあなたが私に精液を絞られるという事実だものっ！」

「……っ！」

確かにこの状況ではマサルはなすすべもなくドエーロスに精液を搾り取られるだろう。それはつまりドエーロスをパワーアップさせてしまうということである。魔法少女の助けになりたいているマサルにとっては許されざることであった。

「そうねえ、私はまずはフェラチオで責めてみようかしら」

「ふえ、フェラチオ……っ!？」

「フフフ。その反応、フェラは初めてのようね」

それはそうだろう。マサルは今日の昼間、モモカにされた手コキ以外は自慰行為しかやったことがないのだ。女の人にフェラをされるなんて初めての経験である。

「それじゃあ初めてのフェラを存分に楽しみなさい」

ドエーロスはそう言うとおもむろにマサルのペニスを啜えこんだ。その生温かい感覚にマサルの脳は衝撃を受ける。

(うっ！ モモカちゃんの手コキと全然違う……)

マサルは無意識のうちにモモカの手コキとドエーロスのフェラチオを比較してしまっていた。現時点ではどちらも甲乙つけがたい。しかし、ドエーロスのフェラチオはここからが本番だったのだ。

「レロレロレロ——」

「んんんっ!？」

ドエーロスの舌がまるで生きているかのように動く。しかも緩急を織り交ぜた絶妙な動きだ。童貞のマサルにとって、こんな刺激を何分も耐えられるはずがない。

「あら、可愛い反応ね。これは手加減しないとすぐに終わっちゃうかしら」

「よ、余計なお世話だ……。この程度、いくらでも我慢できるぜ」

「へえ、そう。それじゃあ、これでも大丈夫なのよねっ！」

ドエーロスは再びマサルのパニスを咥えこむと、今度はバキュームのようにペニスを吸い込んだ。その吸引力はすさまじく、マサルは下半身がなくなるかと思っただけである。

「うおっ、うおっおおっ！ こ、これは、む、無理……っ！」

ドピュッ！

マサルはドエーロスのバキュームフェラにあっけなく射精する。本気を出したドエーロスの前にはマサルの我慢など何の障害にもならなかったのだ。

「んっ、これが魔力を含んだ精液……」

ドエーロスはマサルが吐き出した精液をおいしそうに飲み干していく。すぐに変化がわかるものなのか、ドエーロスの顔がみるうちに嬉々と紅潮していく。

「これは、すごいわね。確かにこの精液には魔力が含まれてるわ。でも、思ったより含有量が少ない……。もっと量が必要なのかしら」

ドエーロスの目が怪しく光る。マサルからさらに精液を奪い取るつもりなのだろう。

「も、もう無理だ。これ以上は出ない……」

「そんなことないでしょう？ まだまだ若いんだから、本当に出なくなるまで付き合ってもらわよ」

ドエーロスは有無を言わさず再びマサルのペニスに食らいついた。黒い光のロープに縛られているマサルは身動きが取れず、ドエーロスから逃げることはできない。猛烈に責め立てるドエーロスのフェラチオから嵐が去るのを待つように耐えるしかなかった。

ドピュッ！

ドピュッ！

ドピュッ！

マサルはもう何度射精したかわからない。意識も朦朧としてきた。

「……」

「あら、さすがにやりすぎたかしら？ 今日はここまでにしておきましょう。でも、やっぱり精液から得られる魔力の量が少ないわ。魔法少女モモカはこれ以上の魔力を手に入れていたはず……。それにここまでこの男を酷使したとも思えない……。どうやらまだこの男の精液には秘密があるようね」

ドエーロスはマサルの拘束を解き、ベッドに投げ捨てた。意識が朦朧としているマサルはそのような扱いを受けても抗議することすらできない。

「記憶も封印しておかないとね。今夜あったことをMGOに話されたら厄介だわ」

ドエーロスが呪文を唱えると、黒い光の輪がマサルの頭を締め付けるようにして消えていっ

た。アラ克蘭の幹部であるドエーロスにとってこの程度の記憶操作は造作もない。

「フフフ。思ったよりパワーアップはできなかったけど、これからこの男で遊ぶ楽しみは増えたみたい。うまく利用すればあのクソ生意気な魔法少女の顔を歪ませることもできるかも……」

ドエーロスは今後のことを思い、喉の奥から歓喜の笑い声が漏れ出てくる。ドエーロスの中ではすでに魔法少女を倒すために計画は出来上がっているようだった。

翌朝——というよりもすでに昼近い時刻、マサルはようやく目を覚ました。昨晚あれほどドエーロスに精液を搾り取られたのだ。疲労でなかなか起きることができなかったのだろう。

「あ、あれ？ おかしいな……。今日は早起きして大学にも行く予定だったのに……。もういや、何だか疲れたから、二度寝しよう……」

結局、マサルはこの日ほぼ一日中眠っていた。目が覚めたのは深夜であり、丸一日を寝て過ごしてしまったのだ。モモカとの出会いで真人間になろうと思ったマサルにとって、初日から大きく躓いたということになる。

「何やってんだよ、俺……」

マサルは自分自身を情けなく思う。しかし、その原因はアラ克蘭の幹部であるドエーロスにあるということは、ついに思い出すことはできなかった。

翌日、マサルのアパートにまたしても来客があった。しかし、今回は魔法少女でもアラクラの幹部でもない。ある意味それ以上に意外な人物だった。

「えっと、天花寺ケイ（てんげいじ けい）、さん？」

「はい。あなたと同じ大学の一年生です」

これが証拠ですと言わんばかりにケイと名乗った女性は大学の学生証を見せてきた。確かにそれはマサルが通っている大学の学生証に間違いはない。つまりケイはマサルの後輩ということになる。

長い黒髪が印象的な女性だった。体つきも男を魅了するには十分すぎるほどで、マサルでなくともここまで近くで話してはドキドキが止まらないだろう。

「えっと、その天花寺さんがどうしてここに？ 俺たち大学は同じですけど、接点はないですよね？」

「表向きはそうですね」

「表向きは？」

表があるということは裏もあるということか。しかし、マサルにはその裏が何なのかまったくわからなかった。

「あなただからお話しますが、私はMGOのエージェントです」

「ええっ！？ ってことは、モモカちゃんの仲間ってことですか？」

「そうなります」

そういうことなら納得がいく。つまり今日マサルの元に来たのも魔法少女モモカが関係しているということなのだろう。

「単刀直入に申します。東海さんには今後、自慰をしないでいただきたいのです」

「えっ？ 自慰……。オナニーをするなってことですかっ!？」

美人の大学生エージェントから『自慰』という言葉が出てきたことも驚きだったが、それがマサルのオナニー禁止を求める言葉だったのだからさらに驚いた。つまりケイはマサルにオナニーを禁をしろというのである。

「はい。東海さんの精液には魔法少女にとって重要な魔力が集まっています。それを自慰行為で無駄にしてしまうのは世界の損失です」

「せ、世界の損失とは、また大きく出ましたね……」

「冗談ではなく、今アラクラんとともに戦えるのは魔法少女だけなのです。しかもアラクランについては幹部を動かしてきた。戦いは今後さらに厳しいものになるでしょう。その時、魔法少女の支えになるのはあなたの精液なのです。つまりあなたの精液がなければ世界が危ないのです」

冗談のような話だが、ケイの目は真剣だった。つまりMGOはマサルの精子によって世界の運命が左右されると考えているのである。

「えっと、つまりそんな貴重な精液を無駄にするようなオナニーはするな、と」

「そうなります」

「でも、いつまでもオナ禁をするっていうのは……」

年頃の男として辛いものがある。

「そこは大丈夫です。数日毎に私たちMGOのエージェントがあなたの精液を回収に来ますから、その時に自慰をしていただいてもかまいません。日にちもあなたの要望通りにするつもりです」

「えっと、ちなみにモモカちゃんは……?」

「魔法少女に性処理をしてもらいたいと?」

ケイの視線が一瞬だけ鋭くなったような気がした。マサルは思わず目をそらす。

「魔法少女に関しては本人が納得しているのであれば派遣可能です。しかし、あくまでも本人の意思が尊重されます。基本的には私たちエージェントが回収に来るものだと思います」

「そ、そうですね。わかりました」

できればもう一度モモカに抜いてもらいたかったが、やはり魔法少女のモモカがあんなことをするというのが異常だったのだろう。あれは白昼夢だと思っただけであきらめるしかない。

「では、早速今日精液を採取してもよろしいですか? また別の日にすることもできますが」

「あー、どうしようかな」

マサルは昨日オナニーをしていない。しかし、なぜかまだオナニーをする気にはなれなかった。どうも精液が溜まっている気がしないのだ。

マサルは記憶が封印されているからわからないが、理由は明白だ。一昨日の夜、ドエーロスに睾丸が空っぽになるほど搾り取られたせいだろう。今はまだマサルの睾丸が魔力入りの精液を必死に作っているところなのである。

「いえ、また後日にしてください」

「そうですか。では、二日後でどうでしょう?」

「それをお願いします」

ケイはお辞儀をしてマサルの部屋から出ていった。

オナ禁をしろということのはなかなか厳しい要求だったが、世界のため、魔法少女のため、モモカのためということであれば仕方がない。マサルはできる限りの協力はしようと思った。

(それに、もしかしたらまたモモカちゃんが性処理してくれるかもしれないからな)

マサルはまだモモカが来てくれることをあきらめてはいなかった。

そして約束の二日後が来た。MGOのエージェントが回収に来ると言っていたが、さすがに

あの美人のエージェントがマサルのオナニーを手伝ってくれるということはないだろう。トイレかどこかで自分で処理し、精液だけを容器に入れて回収するはずである。それをわかってはいても、マサルはソワソワして落ち着かなかった。なぜならマサルはこの二日間約束通りオナニーをしていないのである。二日間、いや、ドエーロスに絞られた日から数えると三日間でマサルの睾丸の中身は満タンになっていた。

健康な人間の場合、およそ三日間で精液は睾丸に満ちるといふ。なお、それ以上オナ禁をしても体内に吸収されるためにあまり意味はないと言われている。つまり今のマサルは魔力をたっぷりに含んだ精液を限界まで溜めている状態なのだ。

「早く来ないかな……。時間までは何も言われなかったからなあ。今度からしっかりと時間まで決めてもらおうかな」

マサルは今すぐにでもオナニーをしたかった。何の制約もなければそうしていたことだろう。そして、玄関のチャイムが鳴った。

ピンポン。

「おっ、来た来た。はい、今行きまーす」

待ちに待った瞬間がやってきた。これで存分にオナニーができる。しかし、マサルを待っていたのは予想もしていなかった人物だった。

「はい、どうぞ。お待ちしてまし——」

「えっ？」

「——た？」

ドアの先にいたのは、MGOのエージェントではなく、まさかの九法モモカだった。しかも今回は魔法少女の衣装ではなく、私服姿である。予想外の人物にマサルは思わず固まってしまった。

「あれ？ 私、おにいちちゃんに今日ここに来ること言っただけ？ それとも別の人を待っていたの？」

確かに待っていたのは別の人物だったが、マサルにとってはその人以上に会いたい人物に会えたのである。

「えっ、モモカちゃんがここに来たってことは……。まさか、そういうこと……っ！？」

つまり、モモカがまたマサルのオナニーを手伝ってくれるということである。マサルにとっては跳びあがりたいたいほどうれしかった。

「なんだかよくわからないけど、驚いてくれたみたいだね。おにいちちゃん、今日は暇？」

「もちろん暇だよ」

大学にも行っていないマサルはほとんどニートのようなものである。当然毎日暇であった。

「じゃ、じゃあ、今日は、私とデートしない？」

「で、デート……っ！？」

何と、オナニーを手伝ってもらえるだけでなくデートもできるとは、マサルにとって今日は人生最高の一日になるかもしれない。

「ダメ、かな？」

「全然ダメじゃないよっ！でも、どうして急にデートを？」

「今日は久しぶりに休暇をもらったの。だからおにちゃんと一緒に過ごしたいなって思って。ほら、あの日から連絡もまともにとれてなかったじゃない？」

「なるほど。そういうことなら」

せっかくの休日に会いに来てくれたいうその事実がマサルを喜ばせた。仕事としてではなく、プライベートとしてモモカと一緒にいることができるのだ。これ以上の幸せがあるだろうか。

「ちよ、ちよと待ってて。今着替えてくるから」

マサルは外出用の衣服に着替えるために一度部屋の中に戻っていった。普段滅多に外に出ないためにジャージを使いまわしている。そのため外出用の衣服を取り出すのに手間取ってしまった。

「お、お待たせ」

「ううん。全然待ってないよ」

ようやく着替え終わったマサルをモモカは嫌な顔一つしないで待っていてくれた。その笑顔からその言葉が本心から出たものであることがわかる。

(なんていい子なんだろう……)

自分にはもったいないと思いつつも、モモカを他の男には取られたくないという気持ちも強まった。

「それじゃあ、行こうか」

「うん」

こうして、マサルの人生初めてのデートが始まったのだ。

もちろん女の子とのデートが初めてのマサルがリードできるはずもなく、行先はモモカの行きたいところである街での買い物となった。マサルにとってはモモカと一緒にいられるのならどこでも構わなかっただろう。

「うくん。いっぱい買っちゃった。ごめんね、おにちゃんを付き合わせちゃって」

「全然。俺も久しぶりに街に来て楽しかったよ」

「もう、おにちゃんはもつと外に出ないとダメだよ？」

「ははは、そうなんだよね」

三日前にモモカと出会って生活を変えていこうと思ったのだが、なぜか翌日にはそんな思いも消えてしまっていた。マサルは気づいていないが、もちろんドエーロスに精液を搾られた影響だろう。

「そろそろ昼食にしようか」

「いいね。それじゃあ、どこか適当なレストランにでも——」

「あっ、それなら大丈夫だよ。友達にオススメのレストランを教えてもらったんだ。この近くだから、そこに行ってみようよ」

「おっ、いいじゃないか。そうしよう」

モモカが行っている『友達』とは、実は一昨日マサルの部屋にやってきたMGOのエージェントであるケイのことである。しかし、当然ながらマサルはこのことを知らない。知っていたとしても特に気にしなかったであろう。

一〇分ほど歩くと、二人は目的のレストランにたどり着いた。街中にあるオシャレなイタリアンレストランで、店の外にもおいしそうな匂いが漂ってきていた。

「へえ、ここかあ。確かにおいしそうなお店だけど、値段が……」

マサルは大学生であり、アルバイトもしていない。生活費は毎月振り込まれる両親からの仕送りが頼りだ。しかも金銭感覚がルーズなマサルは毎月のように散財している。月末ということもあり、今のマサルに豊富な手持ちはないようだった。

「大丈夫。私はMGOからお給料もらってるから、今日は私が奢るよ」

「えっ!?! うれしいけど、なんか悪いなあ」

「今日デートに付き合ってくれたお礼だと思って」

(なんていい子なんだ……)

マサルは涙が出るほど感動した。

それならばとマサルは意気揚々と店に入る。店の外もそうだったが、中は想像以上にオシャレな空間だった。マサル一人、場違いな雰囲気がある。

「こういうところで、何を注文したらいいんだろう……」

マサルはメニューを見ても戸惑っていた。

「これなんかいいんじゃないかな。このお店のオススメみたい」

「じゃ、じゃあ、それで」

店からもモモカからもオススメされては注文しないわけにはいかない。モモカもマサルと同じものを注文しようだ。

「待っている間にトイレに行ってくるよ」

「うん。行ってらっしゃい」

モモカとのデートで緊張していたためか、マサルは少し一人になりたかった。トイレの個室に入ると、ズボンを下ろして緊張を解く。

「やっぱりモモカちゃんとのデートは楽しいなあ。こんな時間がずっとつづけばいいのに」

だが、いつまでもそんな時間はつづかないということをマサルはすぐに思い知らされることになる。

カチャリ。

「えっ？」

確かに内側からカギを開めたはずなのに、なぜかマサルの入っているトイレの個室のカギがひとりでに開いた。何かの故障かと思つてマサルが固まっていると、何とその中に人が入ってきたではないか。しかも男ではない。女だ。マサルはその女を知っていた。

「な、な、な……っ！」

「フフフ、まるで幽霊でも見たかのような反応ね。いえ、あなたにとっては幽霊の方がマシだったかしら？」

何と、トイレの個室に入ってきたのはアラ克兰の女幹部であるドエーロスだった。これにはマサルは心臓が口から飛び出しそうなほど驚いた。

「ど、どうしてお前がここにっ！？」

「それは秘密よ。でも一つ言えることがあるなら、あなたたちの行動は私たちアラ克兰の手のひらの上つてことかしらね」

これはまずいとマサルは一瞬で判断した。つまり情報が漏れているのだ。少なくともマサルの居場所を確実に知ることができる仕掛けがあるということである。そうでなければ今日モモカとデートに来ているマサルがここにいるということがわかるはずがないではないか。

「あと、大声も出さないほうがいいわよ。私がここにいるってことは、この店にいる全員が人質つてこと。あの可愛いあなたの彼女もね」

「くっ……」

認識阻害の魔法のためか、ドエーロスはモモカがあ魔法少女モモカと同一人物だとわかっていないようだ。もし理解していればこんな回りくどいことをしなくとも、今ここでモモカを奇襲すればそれで済む話であろう。

「ど、どうしてこんなことを……。俺を殺しても何の得にもならないぞ」

「前にも言ったけど、別に殺すつもりは——ああ、そういえば記憶を封印してるんだったわよね。仕方ないわね。一度封印を解きましょうか」

「封印？」

マサルが疑問を発すると同時にドエーロスは呪文を唱えた。その瞬間、三日前に封印されたあの夜の記憶が鮮明に蘇ってくる。

「あ、あ、ああああっ！」

「声が大きいわね。誰か一人くらい人質を殺さないとわからないのかしら？」

「うっ、ぐう……」

マサルは絶望に打ちひしがれるも、その慟哭の声すらもあげることができない。

「そう。私はあなたの精液をいただきにきたの。思い出したでしょう？」

「あ、ああ。でも、どうしてこんな場所なんだ。トイレの個室なんて、誰かに見つかるリスク

が大きすぎるだろう」

「それはねえ。前回の精液の量でまだまだあの魔法少女モモカには勝てないことがわかったのよ。だから、今日はたっぷり蓄えたあなたの精液を興奮するシチュエーションで搾り取ってあげようと思ったの」

ドエーロス は魔力の補充が満足にいかないのは量の問題だと思っているが、実際は少し違う。量も大切だが、それ以上にマサルの精神状態が重要なのだ。マサルの精液に蓄えられた魔力はマサルが好意を持った相手に対して特に反応する。それを理解していなければ、効率よく魔力の補充はできないだろう。

だが、それを知られていないことと今マサルのピンチとはあまり関係のないことであった。結局はドエーロスに搾り取られるという未来は確定しているのである。

「さて、もうおしゃべりはおしまい。早速今日の精液をいただきましょうか」

「ま、待て」

「何？ 私があなたの命令を聞く必要なんてないんだから、つまらないことならひどい目に遭わせるわよ」

「俺は今すぐ魔法少女モモカに連絡することができる。もし俺が連絡すれば、お前もただじゃすまないんじゃないか？」

これはあながち嘘ではない。なぜならトイレの外には魔法少女モモカがマサルの帰りをテーブル席で待っているのだから。大きな声をあげればピンチを察したモモカが魔法少女に変身して助けに来てくれるだろう。しかし、その場合はこの下半身丸出しの情けない姿をモモカに見られることになるが。

「へー、こつちには人質がいるんだけど？」

「俺の知ったことじゃない」

「フフフ、たいした悪役ね」

半分以上はハッターだったが、もし何かあってもモモカがどうにかしてくるだろうという期待はあった。とにかくこれ以上ドエーロスをパワーアップさせてしまえば後々魔法少女モモカの障害となるだろう。それだけは避けたかったのだ。

「まあ。たぶんハッターでしょうけど、それならそれでちょうどいいわ。私もただ一方的に搾り取るってのはつまらないと思ってたのよね」

ドエーロスの顔が妖しく歪む。もしかしたらマサルは触れてはいけないドエーロスの暗部に触れてしまったのかもしれないかった。

「ゲームをしましょう。もしそのゲームにあなたが勝てたら私は何もしないでここを立ち去るわ」

「俺が負けた場合は？」

「何もなくていいわ。罰ゲームはなし。これ以上あなたに有利なゲームはないと思うんだけ

「ご？」

「……」

確かにその通りだ。しかし、あの悪の組織アラ克蘭の女幹部がこんなやさしいゲームの条件を提示するだろうか。何か裏があると思うのが普通である。しかし、今のマサルにはそんな裏がありそうなゲームにも乗るしかなかった。どのみちこのまま何もしなければ精液を搾り取られて終わりなのである。それならば少しは可能性のある方に賭けるしかないだろう。

「わかった。そのゲームを受ける」

「いいじゃない。それでこそ少しは楽しめるといふものだわ」

ドエーロス は心底愉快だと言わんばかりの顔つきだった。ドエーロスからしたら初日にマサルを監禁でもすれば目的を達成できたはずなのだ。それをしなかったというのも、マサルが苦しむこの状況を楽しんでいるということでもある。悪質な快樂主義者と言えよう。

「それで、ルールは」

「簡単よ。私が今からあなたのそのペニスをパイズリしてあげる。もし一〇分の間射精しなければあなたの勝ち。ああ、そういえば彼女を待たせてたのよね。いいわ。特別サービスで射精しても一〇分で終わってあげる。つまり私が一〇分間にどれだけあなたを射精させられるかというゲームね」

「やっぱりそういうゲームか……」

わかっていたが、基本的にはマサルの精液を搾り取る内容のゲームだ。だが、これはマサルにとって有利なゲームとも言えよう。なぜならただ我慢すればいいだけであり、時間も一〇分だけだ。しかも延長はなし。罰ゲームもなし。一〇分が経てばこの馬鹿げたゲームは終わるのである。

「準備はいいかしら？」

「あ、ああ。いつでも始めてくれ」

マサルはスマホのストップウォッチ機能で時間を計る。

マサルは全身を脱力させてペニスを萎えさせようとした。しかし、ただでさえ三日間オナ禁をした状態のペニスなのだ。煽情的な格好をしたドエーロスを見て勃起しないはずがない。マサルの努力はムダに終わっていた。

「フッフ、確かにあなたのペニスはいつでもよさそうね」

「い、いや、これは、ちが——っ！」

マサルが何かを言いかけた瞬間、早くもドエーロスの豊富なおっぱいはマサルのペニスを包み込んだ。あまりの柔らかさにマサルは一瞬で言葉を失う。

（な、なんだ、これ……。まるで水風船のように弾力があって柔らかい……）

パイズリを初めて経験するマサルにとって、これは刺激的すぎた。まだドエーロスはおっぱいを動かしていないというのに、マサルのペニスは早くも暴発しそうである。

「フフフ。熱いわね。それにドクンドクンって脈打ってる。元気なペニスの証拠……」  
「うう……」

ドエーロスはまだ肉体的に責めるだけでなく、こうして言葉でもマサルの興奮を高めていく。トイレの個室で、しかもモモカを待たせている状態でこのようなことを仕掛けてきたこともあり、ドエーロスはマサルのような男が興奮する手管を知り尽くしているようだった。

「それじゃあ、時間もないから動くわよ」

パンツパンツパンツとおっぱいがマサルのペニスをこすり上げる音がトイレの個室に響きわたる。これだけでマサルのペニスは早くも暴発寸前だった。

「我慢しないでいいわよ。いくらでも射精していいんだからね」

「く、くう……。だ、誰が、出すもんか……」

マサルはモモカの顔を思い出して我慢している。一秒でも長く我慢することがモモカの助けとなるのだ。そう信じてマサルは歯を食いしばっていた。

「もう、強情ね。それならこれでどうかしら？」

ドエーロスは口からたつぷりとよだれを垂らし、自身の豊満なおっぱいを濡らした。濡れたおっぱいは滑りがよくなり、ぐちゅぐちゅと卑猥な音をたててマサルのペニスを練り上げる。

「うっ！ な、なんだ、これ……っ！」

「どう？ まるでマンコに入れてみたいでしょう？ あっ、あなたはまだ童貞なんだっけ？ ごめんね。お詫びに、普通のマンコでは味わえないような快楽を味合わせてあげるわっ！」

ドエーロスはパイズリの上下運動を速めた。卑猥に濡れた音がリズムミカルに奏でられる。一定の刺激にならないように細かく両手で力の入れ具合も調整していた。その道のプロも顔負けのテクニクだった。

「も、もう、我慢できない……っ！」

「いいわよ、イキなさいっ！ さあ、イけっ！」

びゅるるるっ！

マサルは大量の精液をドエーロスの顔めがけて発射した。その精液のシャワーをドエーロスはうれしそうに浴びている。

「うんっ！ いいじゃない。前よりもいい味になってるわ。でも、やっぱりまだ魔力が不足しているようね……。精液は十分に溜まってるはずなのに、何がいけないのかしら？」

ドエーロスは疑問に思っているようだが、それでもパイズリの手は緩めていない。まだまだ限界まで搾り取る気なのだ。

（ううっ……。こ、このままでと、まずい……。今、何分だ……？）

マサルは始まる前にスタートさせておいたスマホのストップウォッチ機能を確認した。

開始からまだ二分しか経っていなかった。

（まだ八分もある……っ！？ だ、ダメだ……。とても体力が持たない……。何とかして、ド

エーロスの気を逸らさなくては

マサルは賭けだったが、一つの情報を与えることにした。

「ど、ドエーロス……。手を止めてくれ……。もし手を止めてくれたらどうしてお前に魔力が補充されないかを教えるから……」

「へえ。私と取引するつもり？ 面白いじゃない。止めることはできないけど、スピードを緩めることはしてあげるわよ。もしあなたの言う情報が本物なら完全に手を止めてあげてもいいわ」

まずは情報が先というわけだ。それでもパイズリの速度が下がってマサルはだいぶ楽になった。

「俺の精液をいくら摂取してもムダだぞ。なぜなら、俺の感情次第で精液から補充できる魔力量が大きく左右されるからだ」

「ふくん。その魔力の補充量を左右している感情って何なのかしら？」

「好意。『好き』って感情だ」

「なるほど、それで……」

だからこそ、マサルはここまで正直に情報を与えたのだ。マサルがドエーロスを好きになることはできない。つまり、こんなことをやってもムダなのだ。そうマサルはドエーロスに思わせることができる——はずだった。

「フッフ、バカね。こんな貴重な情報を敵に与えるなんて」

「し、知ったところでどうすることもできないだろうっ！ 俺はお前なんかこれっぽっちも好きじゃないし、好きになることはないんだっ！」

「そうかしら？」

ドエーロスはゆっくりにしていた。パイズリの速度をもとに戻した。いや、それ以上に速くなっている。

「ぐあああっ！」

びゅるるるっ！

マサルはあっけなく二度目の射精をしてしまった。時間はまだ半分以上残っている。

ドエーロスは顔にかかった精液をペロリと舐めると、満足したように口角をあげた。

「やっぱり、前回よりも魔力の補充量がわずかにだけどあがってるわね。これって、私のことを少しは好きになったってことじゃない？」

「そ、そんなわけないだろうっ！ 俺はモモカちゃん一筋なんだっ！ お前を好きになることなんてありえないっ！ どうせ前回よりも口に入れた精液の量が増えただけなんだろう」

「違うわよ。確かに魔力が補充しやすくなってるわ」

ドエーロスはマサルに見せつけるようにして精液を口に運ぶ。ドエーロスの言葉の真偽はわからないが、このゲームに関してはマサルの作戦はまったくの無意味であったと言えるだろう。

「有益な情報ありがとう。お礼に、思いっきり気持ちよくさせてあげるわ」  
「うわああああっ！」

びゅるるるるっ！

びゅるるるるっ！

びゅるるるるっ！

結局、マサルは一〇分の間に七回も射精をすることになった。後半はまるで壊れた蛇口のように精液を漏らしていた。このゲームに勝敗があるとすれば、確実にドエーロスの圧勝である。

「ごちそうさま。あなたの精液、おいしかったわよ」

「……」

マサルは射精しすぎて声もでない。少しでもドエーロスをパワーアップさせないために我慢していたのだが、その努力もムダだったようだ。しかも、ドエーロスの戦意をくじくために与えた情報がむしろドエーロスのやる気を出させてしまったようでもあった。マサルのやったことはまったくの裏目に出たのである。

「私はもう行くけど、あなたも早くここを出ないとまずいんじゃない？ 彼女、待たせてるんでしよう？」

「うっ……。モモカちゃん……」

マサルはモモカの顔を思い浮かべる。トイレに入ってもうかなりの時間が経っている。あまりにも遅いとモモカも心配するだろう。

(そうだ……。今すぐモモカちゃんにドエーロスがいることを話せば、何とかなるかもしれない……)

マサルはふらつく足取りで立ち上がった。

「まあ、あなたの記憶は封印させてもらうけどね」

「えっ？」

ドエーロスはまたしても魔法によってマサルの記憶を封印した。マサルは一瞬意識を失い、気づいた時にはドエーロスの姿は見えなくなっていた。

「……俺、どうしてこんなにもトイレに籠ってたんだ？」

マサルは首を傾げながらトイレの個室から出ていった。

「あっ、おにいちちゃん。大丈夫？ ずいぶん長かったけど」

「う、うん。大丈夫、大丈夫」

マサルからするとなぜか急激な疲労感に襲われていたが、モモカとデートしている手前、疲れたとは言いがたい。ここは根性で元気なふりをするしかなかったのだ。

マサルたちはその後イタリアン料理をおいしくいただき、店を後にした。

夕方になり、マサルたちは存分にデートを楽しんだ。あとは帰宅するだけかと思っていたが、最後にとんでもないサプライズが残っていた。

「おにいちゃん、最後に、魔力の補充をしてもいいかな……?」

「えっ!? そ、それって……」

あたりを見回してみると都合よくそこにはラブホテルがあった。まさか純粹そうなモモカが計算してやったのだろうかと疑いたくなる。

だが、問題はそこではなかった。こんなにも興奮するはずのシチュエーションなのに、なぜかマサルのペニスは一瞬も反応してくれないのである。それもそのはずで、マサルは昼間、ドエーロスに七回も精液を抜かれているのだ。今日はもう一滴の精液も出ないだろう。

(ど、どうしてこんな時に限って俺のこは元気がないんだっ!)

マサルは泣きそうになるが、昼間のことを忘れているために自分自身にあたるしかない。

「ご、ごめん、モモカちゃん……。俺、今日はちよつとそんな気分になれなくて……」

「えっ? あつ、ご、ごめんさい……。私のほうこそ……。そうだね、急にそんなこと言われても困るよね……」

「い、いや、うれしいよっ! とつても嬉しかったんだけど、今日はちよつと調子が悪いっていうか……」

「そう言えば昼間のお手洗いも長かったもんね。もしかして、調子が悪い中私の買い物に付き合ってくれたのっ!?!」

「いやいや、大丈夫っ! モモカちゃんと一緒にいたら元気がもらえたから。むしろモモカちゃん俺の元気の源だよ」

「そ、そう……。? それならいいんだけど……」

モモカはまだ少し心配そうにマサルの顔を覗き込む。

そういえば本来の目的は精液の回収だったなとマサルは思い出した。しかし、出そうにないものは出そうにない。こればかりはしょうがないのだと自分に言い聞かせた。

「魔力の補充は、また今度でお願いするよ」

「うん、わかった。それじゃあ、今日はここまでだね」

「そう、なるよね……」

こうして、マサルの人生初めてのデートはなんとも違和感が残る結果に終わったのだった。

体験版は1ヶ月間になります。

あじがね

本作品の感想や誤字脱字の報告などは私の支援サイトである Cien 掲示板でごお願い  
ください。 (<https://ci-en.dlsite.com/creator/16754>)

今回は本作品の体験版をダウンロードしてくださいありがとうございます。

三日月堂